小学校　生活科・総合的な学習の時間　部会

部会長名　真木小学校　校長　中川　真一
実践者名　真木小学校　講師　藤島　佳代

1　研究主題

「気づきの質を高める生活科学習の指導の在り方」
～体験的な活動や交流活動を重視した単元構成の工夫をとおして～

2　主題設定の理由

（１）現代社会の要請から

社会の急速な進展に伴い、異なる文化との共存や国際協力の必要性は益々重要になっていくと思われる。一方で情報、環境、福祉、健康など現代社会における課題は様々であり、深刻化しつつある。このような社会をたくましく生きていくためには、自己を確立し、他者や社会、自然、環境と共に生きていく力が求められている。これらの力は、身近な地域社会の課題に関心を持ち、主体的にかかわり、貢献していこうとする態度を育むことで培われてものである。

このような意味において、本研究主題は子どもの生活や身近な社会の中で見られる様々な事象と自分とのかかわりを考えさせることができ、現代社会の要請に応えていくものと考える。

（２）学習指導要領の趣旨から

今回の学習指導要領においては「生きる力」の育成が強く謳われている。「生きる力」とは自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力のことである。

生活科においては、「人や社会、自然とかかわる活動を充実し、自分自身についての理解などを深めること」「気付きの質を高め、活動や体験を一層充実させるための学習活動を重視すること」が明記されている。また、目標の改善点には、児童が身近な人々，社会及び自然と直接かかわる活動や体験をとおして、身近な地域への愛着をもつことができるようにするとともに活動を通して気付いたことや楽しかったことなどを表現できるようにすることが一層重視されている。この方針及び目標の実現に向けて、活動や体験のねらいを明確にし、学習対象のもつ価値を子どもの生活科の学習とつなぎ合わせることが大切である。そこで、本研究では、体験的な活動を単元の中に繰り返し位置づけることで、気付きの質を高めていくものであり、生活科改訂の趣旨を具現化するものであり、意義深い。

（３）本校児童の実態から

本校児童は、明るく素直であり活動的である。ランチルーム給食や栽培活動等、異年齢による活動をとおして、上級生が下級生のお世話をする姿をよく見かける。また、友だちのいいとこ見つけ等をとおして、集団としての質も高まりつつある。一方で、自分勝手な言動で友だちを困らせたり思いに気づけずトラブルとなったりすることも少なくないことから、人間関係の固定化が懸念されている。

そこで、本校では人、自然、あるいは地域との積極的なかかわりをとおして、問題解決的な学習の工夫、あるいは協同的な学びの場を工夫することによって、学習の楽しさ

を実感させるとともに、自分をふりかえらせながら学んだことを日常生活にも生かしていけるような自立の基礎となる力を育んでいきたと考えている。

3　主題の意味

（１）気づきの質を高めるとは

対象（人・社会・自然）への疑問や魅力をもとに繰り返し働きかけながら、対象への見方・考え方を深め、これまでの自分の言動をとおして対象への新しいかかわり方の意味や価値をとらえ、今後の生活に生かしていこうとする子どものことである。また、生活に生かそうとする子どもの姿は下記の三つの視点（段階）から捉えていく。

○　対象のおもしろさを感じる子ども（導入）

対象に対して、興味・関心や疑問を抱いたり魅力を感じたりすることで、自分なりの課題をもち主体的に学んでいこうとする姿

○　対象のよさをとらえる子ども（展開）

対象に繰り返し働きかけることで、見方や考え方を深め、かかわりの意味や価値をとらえていく姿

○　対象と自分とのかかわりを見つめる子ども（まとめ）

対象のもつ意味や価値を自分との自分自身とのかかわりでとらえなおし、自分の考えをまとめたり、他に広げたり、日常の生活にあてはめたりして、これからの自分の言動や生き方を見出していく姿

（２）体験的な活動とは

体験的な活動とは、生活科の学習を充実させていく上で欠かすことのできないものである。学習のねらいや意図に応じて、子どもたちが五感をとおして対象に直接あるいは間接的に働きかける活動である。例えば、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどの学習活動であり、対象から思いや願いを見出したり、対象の思いや願いを実現したり、対象と自分の生活をつなぐ活動であったりする。また、言語活動を充実させていく中で自分の考えをまとめ、表現したり発表したりする活動であったりする。

このように体験的な活動を取り入れることで､子どもたちが対象とのかかわりを深め、対象のもつ意味や価値に対する気付きの質を高め、認識をより確かなものにすることができると考える。

（３）体験的な活動や交流活動を位置づけた単元構成の工夫とは

単元を３つの段階で構成し、各段階に応じた体験的な活動とそれをもとにした交流活動を位置づけることである。各段階における内容は次の通りである。

「出会う段階」では、対象と出会い、思いや願いを見い出す段階である。「かかわる段階」では、対象に繰り返しかかわり思いや願いの実現に向けて追求する段階である。

「深める段階」では、対象の価値をまとめたり日常生活に当てはめたりしながら自他の思いや自分自身のよさや成長に気付き振り返る段階である。

下記の表は各段階における体験的な活動と交流活動の特性をまとめたものである。

段階		ねらい	体験的な活動	交流活動
対象のおもしろさを感じる	出会う	○対象と出会い、思いや願いを見出したり課題を設定したりする。	○対象への興味関心を高め、驚きや疑問、既習経験とのずれから学習意欲を喚起する体験的な活	○対象との出会いから気付いたことを出し合ったり課題について話し合ったりする。

			動	
対象のよさをとらえる	かかわる	○対象にはたらきかけ思いや願いを追求したり課題を解決したりする	○対象に繰り返しはたらきかけ対象のよさをとらえたり関係づけたりする体験的な活動	○調べて分かったことや課題解決に向けて取り組んだことを話し合う
対象と自分自身とのかかわりを見つめる	深める	○対象の価値を自分とのかかわりで考えたりまとめたりする。 ○学習の成果を自分の生活に生かしたり他に伝えたりする。	○対象のよさを自分とのかかわりで意味づけたり価値づけたりする体験的な活動 ○学習の成果やできるようになったことを発表したり報告したりする体験的な活動	○対象に対する自分の考えや課題解決に対する自分の考えを話し合う。 ○これまでの学びのよさや友だちの発表について意見や感想を話し合う。

4　研究の目標

第２学年の生活科学習において、地域社会との関わりの中で体験的な学習や交流活動の位置づけによる単元構成の工夫を通して、子どもたちが、対象のおもしろさやよさについて考え、自立の基礎を身につけていく指導の在り方を究明する。

5　研究の仮説

生活科の学習において、各段階のねらいに応じた体験的な活動や交流活動を位置づければ、子どもが対象のおもしろさやよさを実感するともに自分自身とのかかわりを見つめ直しながら学んだことを日常生活に生かしていこうとする子どもが育つであろう。

6　研究の計画

（１）単元名「ハートをつなごう」（２年生　９月～１１月　２２時間）

（２）単元の目標及び指導計画

単　元		総時数	２３時間	時期	９月～１１月
単元の目標	○地域の自然や施設、さまざまな人たちについて、もっと知りたいという気持ちをもち、さらに詳しく調べたりすることができる。 【関心・意欲・態度】 ○仕事を体験する活動を通して、地域への愛着をいっそう深め、社会の一員として、自分の役割や行動の仕方について考えることができる ○感じたことや思ったことを地域の人に伝える方法を考えたり、地域で見つけたことや体験してきたことを振り返って、工夫して適切に表現したりすることができる。【思考・表現】 ○体験してわかったり考えたりしたことを、友達や家族、地域の人々に伝えることを通して、相互に交流する楽しさやよさがわかり、自分の考えを深めたり新しい発見をしたりすることができるようになる。 【気づき】				

段階	時	具体的な目標	学習活動	指導上の留意点（援助・支援）
出	1	●ハートをつなごう ・これまでのまち探	○一学期のまち探検を思い出し、印象に残ってい	□まち探検の時の地図や写真などを提示し、できるだけ具

会う		検で、お世話になった人訪ねたところなどを思い起こすとともに、また見に行きたいなどの意欲を高められるようにする。	ることを話し合う。 ○再び行ってみたいところや、会ってみたい人などを話し合う。	体的に思い起こすことができるようにする。
	2・3	●前のたんけんをふりかえろう ・まち探検で訪ねる場所を決めるとともに、目的を明確にした計画を友達と協力しながら立てることができるようにする。	○探検場所で聞きたいこと、やりたいことなどを話し合う。 ○探検パスポートを作成し、めあてや約束などを話し合い、計画をたてる。 ○訪問先に連絡をとり、探検日の日程決める。	□３グループを編成し、前回経験したことや学習したことについてまとめたものを活用する。 □活動する内容については、子どもたち自身で考えさせる。
	4・5・6・7	●仕事をじっくりみてみよう ・探検場所で、仕事をする人たちの工夫や努力について、発見したり、聞き取ったりすることができるようにする。	○見学や観察を通して気づいたことや考えたことを探検パスポートに書く。 ○事前に考えた質問や、見学して新たに生まれた疑問などを質問する。	□仕事の体験の時に、子どもたちができそうな事を体験先と打ち合わせをし、実際にその仕事をしているところを見せてもらえるよう依頼しておく。 □質問がスムーズにいくように、事前に考えた子どもたちの質問を探検先に伝えておく
関わる	8・9・10・11	●体けんしてみよう ・体験場所で仕事の一部を体験したり、手伝ったりすることを通して、仕事の大変さや苦労、仕事をしている人たちの思いに気付く事ができるようにする。	○仕事の内容を見たり聞いたりする中で、自分にもできそうなことを教えてもらい、やってみる。 ○仕事の体験をしてみて、感じたことや考えたことを探検パスポートに記録する。	□体験先と体験することについて十分な打ち合わせをしておく。
	12・13・14	●気もちをつたえよう ・まち探検を通してお世話になった人に感謝の気持ちを伝えたり、学んだ町のよさを多くの人に伝えたりすることによって地域への愛着をもつことができるようにする。	○まち探検でお世話になった方にお礼を伝えることや、わかったことを身近な人たちに伝えることを話し合う。 ○お礼の手紙を書き、届ける。	□どうしたら喜んでもらえるのかという視点から、いろいろな方法を考えさせる。
深	15	●はっぴょう会のじ	○発表の計画を立てる。	□特に伝えたいことに絞って

め る	・ 16 ・ 17 ・ 18 ・ 19	ゅんびをしよう ・見つけた町のよさや、知ってほしいことや人などを伝えるために、発表会の計画を準備することができるようにする。	**〇体験を振り返り、グループごとに仕事のひみつや工夫を紹介しあう** **（本時）** 〇人権集会にむけての準備や練習をする。 〇仕事の体験をさせてもらったグループホームや保育園の方へ人権集会の招待状を作成する。	表現させるようにする。 □グループで協力してできるようにする。 □グループごとに、工夫するべきことを助言していくようにする。
	20 ・ 21	●はっぴょう会をしよう ・人権集会で工夫した表現ができるとともに、他学年へ地域のよさを知らせ、すばらしい地域の人の存在に気づいてもらうことで、交流することのよさに気付く事ができる。	〇まち探検や仕事の体験をして、見つけたことやわかったこと、思ったことを人権集会で発表する。	□聞いている人たちが、わかるような発表を意識させる。
	22	●みつけたよあこがれのしごと ・地域ではさまざまな仕事をしている人がいることに気付くとともに、自分もあこがれの仕事のつきたいという気持ちをもつことができる。	〇探検場所意外の地域で働いている人たちについて話し合う。 〇教科書を参考に、いろいろな仕事があることを話し合い、仕事の内容を想像する。 〇将来やってみたい仕事について話し合う。	□仕事の苦労や努力していることも話をさせるようにする。 □教科書以外の写真以外にも、さまざまな仕事に関心をもたせるようにする。 □何になりたいかを考えていない子どもにも、さまざまな仕事があることに気付かせる。

7　指導の実際

〈本時分〉

〇日時　平成２７年１１月１７日（火）　５校時（２年１組教室に於いて）

〇主眼（ねらい）

・地域で仕事をする人たちの工夫や努力について考えることができる。

・体験したことを振り返って、わかったり考えたりしたことを、友達や家族、地域の人々に伝えることを通して、相互に交流する楽しさやよさに気づくことができる。

〇準備物　教師：写真

児童：探検パスポート・ワークシート・まとめた資料

〇展開

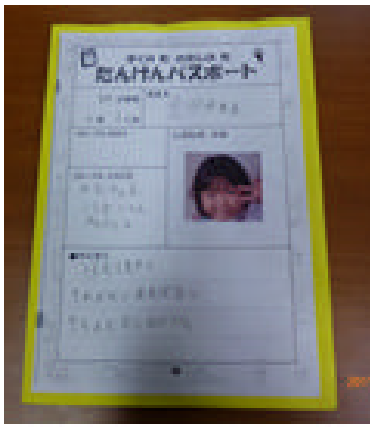
段階	学習の活動	準備資料	教師の支援と（・）評価（〇）
出	1. 写真を見て、どこのだれかを考え	写真	・桜木荘・真木保育園ではたら

会う	る。 2. 本時の学習課題をつかむ。 めあて しごとのひみつやくふうをしょうかいしよう。		いている人の写真を見せる。 ○誰の写真かを発表させ、それぞれが働いている人たちを思い出しながら考えている。
関わる・深める	3. 仕事のひみつや工夫を紹介しあう ①桜木荘…質問形式で写真を見せながら発表しあう。 ②真木保育園…３グループでの発表する。 ・仕事のひみつや工夫をみつけて、自分たちが思ったことなどの感想も取り入れ、発表をする。 ・一学期の探検と比べながら質問や感想を述べ合う。 ・仕事をする人たちの苦労や、喜び、仕事にたいする思いなども話し合う。		・１グループ３～４人とし、見たことや仕事の体験をしたことから、みんなに知らせたいことを発表させる。 ○仕事の内容・努力や工夫・喜びなど仕事に対する思いを見たり、体験したことを通してわかりやすい発表をしたりしている。 ・グループの発表ごとに質問や感想をとる。
まとめる	4. カードに感想をまとめ発表する。 ・すばらしい仕事をしている人がいる自分たちの地域について思ったことや考えたことをまとめ発表する。	探検パスポート 【写真 1】	

(1)　出会う段階

出会う段階では、一学期のまち探検の学習で、印象に残っていることや楽しかったこと、発見したことなどを振り返りかえらせ、施設訪問に対する意欲付けと、グループを作り、訪問してみたい施設を話し合わせた。児童にとって身近なところであるグループホームと保育園を体験先とし、より身近な施設訪問を行うこととし、活動への意欲を高めた。３グループを編成し、めあてや約束、見てみたいことや聞きたいこと、やりたいことなどを話し合わせた。

また、一学期の「まちたんけん」では、訪問前に教師が事前に連絡を取ったり、お礼の電話をしたりしていたことを告げ、今回の活動では、自分たちでしてもらうことを伝えた。【写真２】



【写真１】

グループホームでは、高齢者の介護の仕事を見せてもらった。足の不自由な方、目の

不自由な方、車椅子に乗っている方、寝たきりの方との出会いは意味深い出会いとなった。「最初おばあちゃんたちを見たとき、少し怖くなりました。涙が出そうになりました。」という感想を書いていた。働く人たちに視点をあて、じっくり仕事を見る活動では、「車椅子で坂道を下りるときは、乗っている人が落ちないように、車椅子を後ろ向きにして下りるような工夫をしていました」「ベッドから移動させたり、トイレのお手伝いをするときは、二人で協力してあぶなくないように工夫していました」「同じ食べ物だけど、ミキサーにかけたり、粉でゼリーみたいにしたりして、食べやすくするための工夫をしていました。」「飲んだお茶の葉を乾燥させたものを、寝たきりのおばあちゃんたちの手に汗やばい菌が入らないように使っていた」など、働く人たちが工夫していることや、新しい発見をすることができた。

【写真２】

保育園では、卒園児がいたり、在園児に妹や弟がいたりしたことから、子どもたちにとって親しみや愛着をもった出会いとなった。ここでは、３つのグループを１歳児・３歳児・５歳児とそれぞれのクラスに分け、仕事を見せてもらった。１歳児のクラスでは、オムツを替えるところや配ぜんの様子などを見せてもらった。ここでは、「給食をたべるのが、他のクラスより遅いので、早めに給食が始まる」ことや「しずかにお話を聞いたり、椅子に座ったりできるように、本を読んであげたり、歌を歌ってあげたりしてみんなを落ち着かせている」「こどもたちが、あぶなくないように柵をして決められた場所で遊べるようにしていた」などの先生たちの工夫を見つけることができた。３歳児のクラスでは、「できることとできないことがあって、声をかけたり、見守ったりすることも多かった」「学校と同じように、先生の机があって、みんながおやつを食べている時やお昼寝をしている時に連絡帳を書いていた」「おうちの様子や保育園のようすが分かるように、毎日連絡帳に書いていた」「がんばった人にかっこいいシールをあげてがんばった人をほめていた」など先生と子どもたちの関わり方の工夫を見つけることができた。５歳児は、外での活動が主だった為、保育園にある柵について「子どもたちが、外に出ない様に鍵を二重にしたり、張り紙をして外から来た人にも分かるような工夫をしていた」また、「自分でできることがたくさんあって、一緒に遊べて楽しかった」「黒板に字を書いたり、当番があったり、学校と似ているところがたくさんあった」など安全面の配慮や保育環境の工夫などに目を向けることができた。

(2)　関わる段階

関わる段階では、グループ活動を中心に、仕事の内容を実際に体験させてもらい、わかったことや感じたことを記録していくようにした。

グループホームでの活動では、活動を行う前に、自分たちにできそうなこと、してみたいことを子どもたちに聞いた時に「おばあちゃんたちに自分たちが作ったおにぎりを食べてもらいたいです。」「車椅子をおして一緒に散歩をしたいです」等仕事を見せてもらったことで、意欲的に活動に入ることができた。「車椅子をおす時にドキドキしたけど、声をかけながらゆっくりおすように気をつけておしました」「一緒に散歩をするときに、おばあちゃんに合わせてゆっくりと歩きました」等、仕事を見させてもらった時の工夫を思い出しながら、活動を行う姿が多

【写真３】

く見られた。また、「怖かった、涙がでそうだった」と言っていた児童が「耳が聞こえにくいおばあちゃんの耳元に行って声をかけると返事をしてくれたのがうれしかったです」【写真３】と直接関わる中で高齢者との関わり方を感じとることができたのではないかと思う。また、何度もグループホームに行くことで、顔を覚えてもらったり、声をかけてもらったりしながら、グループホームの職員やおばあちゃんたちとも愛着をもって接する姿を見ることができた。

保育園の活動では、自分たちより年下の園児のお世話をしたいという気持ちが、どの子も強く体験活動をとても楽しみにしていた。１歳児クラスでは、初め、何をすればいいかわからず、戸惑っている様子の子どもたちだったが、先生たちに声をかけてもらい、おむつの交換を手伝ったり給食を食べさせたりとても意欲的に取り組んでいた。特に給食を食べさせるのにとても苦労したようで、「なかなか、食べてくれなくて好きなものから食べさせてみたら食べてくれました。」【写真４】「エプロンをしてあげても、何度もはずされて大変だった」など、見ている時に先生たちがしていたことが、実際にしてみるととてもたいへんな仕事だということを感じとったようだった。３歳児クラスでは、主に声をかけて見守る場面が多く、トイレに行く園児に優しく声をかけてあげたり、洋服のたたみ方を教えてあげたりと１歳児とはまた違った活動に取り組むことができた。５歳児クラスでは、ほとんどの園児が自分の事は自分でできるため、子どもたちは、園児と一緒に教室で遊んだり屋外で遊んだりする中で、先生たちが、どんな風に園児と関わっているのかを体験することができたのではないかと思う。

【写真４】

このような、関わる活動を通して、子どもたちは仕事の大変さや働いている人たちの苦労を言葉だけでなく、具体的な活動や体験を通して知ることができたのではないかと思う。また、お礼や体験した感想を手紙や寄せ書き（【写真５】【写真６】）にして届けることで、自分たちの思いや感謝の気持ちを体験先に伝え関わりを深めることにつなげることができた。

【写真５】

【写真６】

(3)　深める段階

深める段階では、まず、活動した内容をグループごとにまとめ、仕事のひみつや工夫について紹介し合うことにした。

探検パスポートに記入したことや写真をもとに活動を振り返りながら進めていった。働いている人の仕事の工夫や見たり体験したりしたことで分かったことに視点を置きまとめていった。本時では、まとめたことをグループで紹介し合い、一学期の探検と比べな

【写真７】

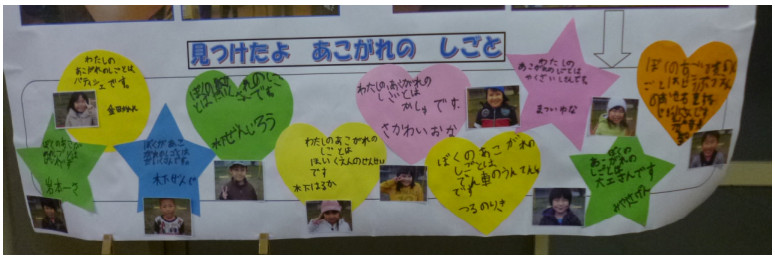
がら感想を発表し合い交流を行った。【写真７】

「大変な仕事なのに、いもの笑顔で働いていました」「命をあずかっている大変な仕事だなと思いました」等、仕事をする人たちの苦労や喜び、仕事に対する思いなどに気づくことができたのではないかと思う。

また、まち探検で自分たちが出会った地域のすてきな人たちのことを、家族や地域の人たち、他学年にも伝え、地域のよさを知ってもらうことにした。そして、人権集会でこの取り組みを発表することにした。【写真８】

また、子どもたちの感想を、呼びかけの言葉にし、ひとりひとりが自分の思いを発表することができた。その後、地域で働いている人以外にもどんな仕事があるのかを話し合い、「大人になったらどんな仕事がしたいですか？」と問いかけたところ、全員があこがれの仕事をカードに書いていた。「大工さん」や「パティシエ」「やくざいし」「じゅういさん」「ほいくしさん」など、それぞれが、さまざまな仕事に目を向け、やってみたい仕事を積極的に発表する姿を見ることができた。【写真９】

【写真８】



【写真９】

８　研究のまとめ

本研究の目標は、地域社会への感心を高めると共に、自分にできることは何かを考えたり体験・交流したりすることを通して、対象のおもしろさやよさを実感し、生活に生かしていこうとする子どもの育成を図ることである。そこで、具体的な手立てとした以下の２点から研究のまとめを行う。

（１）各段階に応じた体験的な学習や交流活動の位置づけによる単元構成の工夫について

○　一学期のまち探検の活動について、写真を提示したり出会った人などとのかかりを振り返らせることで、学習への意欲を高めることができた。

○　各段階で様々な体験（見る、聞く、手伝う、かかわる等）を取り入れたことで、介護や保育の仕事の工夫について気付いたり実際に高齢者や幼児と関わったりする中で仕事の楽しさや大変さを実感させることができた。

○　様々な活動においてグループ活動を位置づけ、自分の考えを発表したり友だちの発表に対する感想を出し合ったりしながら交流活動を位置づけたことで、協力的な学びの楽しさに気付かせることができた。

（２）自分との関わりを見つめ、生活に活かすことについて

○　お世話になった地域の人たちに対して、お礼や感謝の気持ちを自分たちなりに工夫して伝えていこうとする子どもの姿が見られた。

○　実際の仕事体験を通して、その楽しさや大変さを実感させるとともに自分の将来の仕事についても考えさせることができた。

9　成果と今後の課題

【成果】

○　活動や体験したことを、グループごとに発表したり交流したりすることで、気付きの質を高めることができた。

○　学習したことを地域の人や他学年に伝える工夫をしながら自分なりに表現し、伝えていこうとする姿が見られた。

○　学習後、地域で働く人や地域で暮らす人たちに進んであいさつするなど、地域をより身近に感じさせることができた。

【今後の課題】

●　自分たちの住む地域にあるさまざまな施設や、地域に住む人たちとの出会いや交流活動の場を工夫しながら、今後も地域に愛着をもてる子どもたちを育てていく必要がある。

●　学校行事や各教科の内容との関連化を図り計画的・継続的な取り組みが必要である。

◎　参考文献

・「せいかつか下　なかよし　ひろがれ」　年間指導計画・評価計画案
・「小学校学習指導要領解説　生活編」